二〇二二年八月一二日

登山靴並ぶ山小屋星月夜　みきお
高野槙香る仏間の涼新た　たか子
法螺貝の谺に拝す山開き　智恵子
星月夜先師先輩天の句座　宏　虎
下駄履きで庭に見上げる盆の月　こすもす
初耳ぞそのエピソード盂蘭盆会　そうけい
秋思憑く息子の罹患聞きしより　せいじ
朝月の残る港を船出づる　ひのと

二〇二二年八月一一日

落蝉のころころ掃かれ竹箒　あひる
川風を蹴上げて進む盆踊　素　秀
子ら去にてぬ静けさ余す盆の月　なつき
田水見る散歩が日課生身魂　みきお
ひとふくろ残る手花火子ら去りぬ　もとこ

二〇二二年八月一〇日

検査終へ安堵のビールほしにけり　もとこ
草刈りを済ませ安堵や風は秋　千　鶴
くろぐろと山迫りくる良夜かな　澄　子
理髪店鏡が刎ねる晩夏光　あひる
乾パンの味懐かしき敗戦忌　宏　虎
ゆつくりと汐汲坂を白日傘　む　べ

二〇二二年八月九日

火の匂ふ祭衣を畳みけり　ひのと
富士臨み悠々自適生身魂　澄　子
花火果てさゝやき残る堤かな　ひのと
郭公の声の谺すログハウス　智恵子

二〇二二年八月八日

甘樫の丘にのぼれば秋津群れ　明日香
棚経や前列占めてひ孫どち　うつぎ
空咳をしておもむろに盆の僧　宏　虎

二〇二二年八月七日

球児らの立礼涼し声もまた　うつぎ
船腹を染むる最後の大花火　ひのと
酔ひどれのごと片陰をなぞり行く　せいじ
慈雨とおり過ごして秋の出水かな　たか子
言ひすぎし言葉戻らず法師蝉　明日香
次を待つ闇こそよけれ揚花火　澄　子

二〇二二年八月六日

指出せば秋津のとまる明日香路　明日香
マンホール打ち上ぐ力秋出水　みきお
かなかなや朝靄かかる峠口　うつぎ
目瞑りてカリヨンを聞く原爆忌　せいじ
夕堤ボート逆さに運ばるる　ひのと

毎日句会みのる選・二〇二二年八月一四日